



オリジナル注染ゆかた

主催団体 / オリジナル注染ゆかた

【団体概要】

浜松で大正時代頃から盛んに行われている注染染めの展開づくりに取り組む任意団体。注染を伝え、普及するため、現在は小ロットの発注窓口づくりに取り組んでいるが、PR活動としてアーティストがデザインした浴衣制作も行っている。

【事業概要】

2012年には、浜松在住のアーティスト・戸塚ゆうデザインの浴衣を2パターン、各2色を制作。シーズン中最低3回は着用して外出し、その写真を送ること、レポート提出を条件に、60名に配布した。2013年は、「注染×シルクスクリンプロジェクト」として、同じく浜松を拠点として活動するアーティスト・スサイタカコにデザインを依頼。染色した後、シルクスクリンを施し、それぞれの技法の特色を活かした図柄を生み出した。第61回七夕ゆかた祭り盆踊り会場にて発表。



注染とは、布を染める技法のひとつ。型紙を用いて染めない部分に糊を付け、染める部分の周囲に土手をつくり、その内側に染料を注いで染め上げる。染料は繊維一本一本の芯まで染めるため、表裏なく柄が付けられる。また染料を同時に注ぐことでつくられる“にじみ”や“ぼかし”は、柔らかく優しい風合いを表現する。浜松では大正頃から盛んに行われ、産地として名前が知られている。

このプロジェクトの主体となっている大石麻衣子さんは創業93年の呉服屋「ファッションきものいしばし」の子として育ち、現在は子育て、商売、中心市街地盛り立てと忙しい毎日を過ごしている。そんな中、大石さんは新たに注染のプロジェクトにも関わるようになった。

「注染のアピールをしたいんですよ。店頭にたくさん置きたい。でも注染って工場をつくった後は、まず問屋が買う。東京や京都や名古屋といった大都市の問屋が買います。うちは、そこに買いに行くわけです。大体その段階では、大手のデパートさんとかがごっそり買っていった後だから、手に入らない。ここ（浜松）でつくっているのに手に入らない」。

きっかけは素朴な疑問からだった。

「地域問屋も手に入らないという、この状況はどうなんだろう？地産池消とよく聞けけれど、小売店の手に入らないってどうかな、と」。

そこで自分たちでつくることができないか考えていた時、もうひとつ疑問が重なった。

息子さんの小学校の掲示板に貼ってあった



「浜松のすごいところ」が「ピアノの生産量ナンバー1」、「オートバイの生産量ナンバー1」、「サインペンのペン先生産量ナンバー1」……。40～50代の人と注染や着物の話をしているすらも「あ、母が言ってた」。和装教育がなくなっている。民族衣裳なのに着なくていいという教育になっている、と。

2012年に初めてオリジナル柄のゆかたをつくった。実は呉服業界、繊維業界、浴衣振興会はつながりがない。繊維業界から呉服と浴衣に声をかけてくれた人がいて、そこから、アーティストを登用した浴衣の制作が始まった。

注染の技法や型紙制作を工場や職人から教わり、それをベースとして図柄を描いてもらい、2パターン2色ずつの図柄で72着を制作。それを「三回

以上着てもらい、レポートを書いてもらった人に差し上げた。今後注染というものを理解してもらって、着て、口コミ活動に参加してもらいたかったから。本当に多くの方が着てくださって、『楽しんで着ています』って言ってくださった。ショッピングに行ったよとか、ピクニックしたよとか報告してくださいました。ライブや海外に行った方もあります。飲み会にも、自分が出品した書道展に着て行きましたとか」。

現在、市場に出ている多くの浴衣はシルクスクリーンが多い。布地の上からプリントするため、繊維に染料が染み込む注染と比べると、生地目を埋めてしまうため通気性がないという難点がある。しかし一方で、「蛍光色や金色などの色を使える、



細い線が表現できるなどの良さもある」。2年目となる2013年は、そうしたお互いの長所をかせあわせる試みだった。「遠目で見ると注染の良さが引き立つ。近くで見ると、立体のシルクのおもしろさがでる。だから、遠目と近場での印象はずいぶん違う」。

「選ぶ楽しみが着物の楽しみ」と大石さんは言う。呉服屋特有のコミュニケーション販売は、時間がかかる一方で、お客さんとの強い関係が生まれる。

「何日も何日も、何回も何回も通ってもらって決まるのが、洋服の販売とは違うところです。家族構成とか娘への思いとか、親族の行事にまで話が及び、『今度お兄さんの結婚式も着ていきな

よ、この間のあれがあるじゃん』という会話につながって行くんですね」。

中には、「しょっちゅういらっしゃるけど3、4年何にも買ってない人も多いですよ。でもその人が『娘の晴れ着はお宅以外考えられない』と言ってくださいます。それが呉服屋。お客様のほうが、幸も不幸も呉服屋に報告したくなる。そういう関係をつくるのがうちのやり方だし、他の呉服店もそうだと思います。コミュニケーションありきです」。

着付けを丁寧に教える講座を「まちゼミ」に参加して開催したりと、中心市街地に寄与する活動とも連動している。そして、コミュニケーションを大切にする大石さんだからこそ生まれたと言える発想が「盆踊り」だ。

「はじめは浴衣を見せる場、着ていける場として開催しただけだったんですけど、やってみると、盆踊りは地域コミュニティと楽しくつながるいいツールだと気づきました。まちなかでは盆踊りがなかったので、2012年には電車の高架下でやりました。知識も何もなかったので、そんな場所でもできるのか不安だったんですけど、でも踊りの先生にうかがうと、『どんな場所でもできるよ。』とおっしゃるし、『照明がないんです』と言うと『暗くても平気』と言ってくださって(笑)」。

ただオリジナルで浴衣をつくるだけでなく、誰でも自分柄の注染を注文できる窓口をつくりたいと大石さんは言う。産地である浜松ならではの楽しみな展開である。

同時に、地域でのプロジェクトの観点から見た場合、本筋からの派生企画である“盆踊り”とその他の関心事との連動のつくり方に見られる、視野の広がりや、その結びつけ方に生活している人ならではの視点が強い。

大石さんは、まちなかのこと、子どもの成長のこと、お店のこと、そして注染のこと、という違った軸に優劣をつけず、同じ気持ちで取り組んでいる。それゆえ、それぞれの中に、他の関心事との共通項が見出せた場合には、無理なく結びつけられる。生活と仕事を無理に切り分けない目線の持ち方は、実感や当事者性を持ちつづけたままプロジェクトの広がりを生む力となっている。(Su)





2012年
デザイン：戸塚ゆう(アーティスト)
染色：二橋染工場

2013年
デザイン：スサイタカコ(アーティスト)
染色：二橋染工場
シルクスクリーン：エディション ED